
ANTI × BRAVER

熊蟬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ANTI×BRAVER

【Nコード】

N9600X

【作者名】

熊蟬

【あらすじ】

仮作品

勇者と魔王がいるありふれた世界。

勇者は魔王討伐、魔王は世界征服するために各々の信念をぶつけ合う……よく見た世界。

この物語は、そんな世界にいる変哲もない傭兵のお話で――

プロローグ（前書き）

仮作品

プロローグ

この世界は回っている――

数一〇億という人々が同じ世界に立ち、その個人個人が同じ時間^{とき}を過ごしている。そして、そんな自分はこの世界を作り上げている一人なのだ、と考えてみても全くもって実感は湧かない。

自分がこの世界にとってはどんな立場で、どんな役割を果たしているのか。正しい答えは、神なる者にしか分からないだろう――

「おい！ 聞いてんのか落武者――！」

「……だから俺は落武者じゃない、傭兵だ――！」

人気のない山道を並んで歩く男女二人組――

「落武者も傭兵も然程変わらないじゃん」

「天と地ほど変わるわ！ …… はあ、全くこれだから脳筋盗賊娘は――」

男、傭兵ロイスは酷く頭を悩まされていた。その原因は言わずもがな、隣にいる女――盗賊ルキである。

ルキとは出会って数時間ほどしか経っていないのだが、何故か旧友であるかのように馴れ馴れしいのである。その上、何度も拒んでも勝手に同行してくるといふ図々しさにロイスは完全に参っていた。

「脳筋じゃねーよ！ …… それよりも、少し休憩しないか？ ここ数時間歩きっぱなしだからさ、疲労度溜まりっぱなしでさ――」

「生憎、俺は全くもって疲れていないんだ。休みたいなら一人で休むといい……… じゃあな、盗賊ルキ。短い間だったけど、楽しい旅だったよ――」

この時を迎えるためにいままで疲れを我慢してきたんだよ、とロイスは心の中で愚痴りながらルキに爽やかな顔で一方的な別れを告げる。ようやくいつもの一人旅に戻ることが出来る――

「待てよ！ 隣町まで一緒に行くって約束だったじゃんか――！」

そんなロイスの服の裾をルキは思いつきり引っ張ってきた。思わ

ぬ方向からの力に体が揺らいだが、棒になりつつある足でどうにか堪えた。

「……それは君の勝手な約束だろう？ 俺は君に一方的に話しかけられ、一方的に契約を交わされ、拳句の果てには一方的に付いてきたんだ。……これ以上俺に構うのはやめてくれ——」

だからそんなルキを一方的に捨て去ってやるのだ、とロイスは彼女を振り切って先に進もうとする。

チラリと後ろを振り返るとルキはしょんぼりとした顔で下を俯いていた。少しでも罪悪感のようなものを感じたが、どう考えても被害者はこちらなのだ、と気持ちを入れ替えながら足を再び動かし始めると、ルキの姿はいつの間にか見えなくなっていた——

（——チツ！ まさかこんなところで！！）

もう少し進んでルキから距離を離したいところだったが、その歩みは思わぬ来客によって止められることになる。

『Grrrr……』

「くそ……今日はとことんついて無いようだな……！！」

<ノック>
叢から突如飛び出してきたウォーウルフは、酷い興奮状態でこちらを睨んでいる。そういえばこの森に行く前に居た街の酒場で、今の時期はウォーウルフの産卵期で奴らは非常に気が立っていて危険だ、と小耳に挟んだことをいまになって思い出した。

「くっ……！！」

ウォーウルフから、その鋭利な爪を強大な剛腕によって繰り出される猛攻をロイスは間一髪で避けるものの、遂には剣で防ぐ形になってしまった。普段はそこまで凶暴でないウォーウルフも、いまに至ってはその面影は全くもって見られない。

口元から溢れる唾液が降りかかる不快さに耐えながら、ロイスはどうにか相手を受け流す。すると、興奮状態で前に突き進むことしか考えていなかった相手はそのまま大木にぶつかって倒れた。

その隙を逃さずにロイスは詠唱を始める。ウォーウルフも少し冷静になったのか、こちらが詠唱していることに感づいて態勢を戻そ

うとする。

「——イグニ——！」

しかし、ロイスのほう^{ファーストスベル}が速かった。火属性魔術の中での最も簡単な初等魔術だったため、あまり魔術に長けていない彼でも容易に唱えられたのだ。

「——aaa！」

剣先から放たれた炎球が巨体に勢いよくぶつかり、辺りの木々をも巻き込んで燃焼する——

爆音とともに舞い上がった煙が少し晴れると、焼け爛^{ただ}れた皮膚から血を流しているウォーウルフの姿が見えた。両足でしっかりと立っているが、ヒューヒューと弱った息を漏らしているところからイグニは効いていると考えていいだろう。

（今がチャンスだ……！）

狂暴な乱舞が止まっている今こそが、仕留めるべき時であるとロイスは直感した。ウォーウルフは産卵期であるため、もしかしたら火事場の馬鹿力で捨身的な行為を取られるのも御免なのだ。

「——なッ!?」

ロイスは勢いよく地面を蹴って、心の臓を目がけて前に進むつもりだった——

（こんな……こんな、ところで……ッ——！）

しかし、彼の足は地面を蹴りきれずに足首がぐねりと曲がってしまっていた。恐らく、先ほど行動を共にしていた盗賊女を振り切るために足に無理な負担をかけていたのが原因なのだろう。もしかしたら他に理由があるのかもしれないが、一気に窮地に立たされたロイスにはそれしか考えられなかった。

片足を浮かせるようにしてどうにか立ち上がると同時に、彼を——瞬で包み込む影——

紅い——鋭い眼光はまるでロイスを突き刺すかのようだった——
血生臭いその臭いは、今は不快さよりも恐怖を感じるようだった

「く、そ……っ」

ロイスは剣を握りしめていた右手の力を緩めた。
足が片一方使えない状態で、いま目の前にしている者に勝てるすべなど有りやしなかった。もし奇跡的に一度攻撃を防げたとしても、二度目は無い――

（はは……しょうもない、人生だったな――）

死ぬ直前のサインだからなのだろうか、ウォーウルフの動きが物凄くスローモーションに見えた。今なら間一髪で攻撃を避けれるのではないか、と思ったが分かりきっている話……こちらの動きも同じように遅かった。

ふと脳裏に走馬灯のように駆け巡ってきた家族の顔、村人の顔、傭兵として過ごしてきた日々の全て――

そして、あの勇者の姿が――

『――Grrrrrraaaaa!?!?』

「ん……………」

そろそろ鋭利な爪で体を引き裂かれて、もがき苦しみながら死ぬくらいだと思っていたのに、ロイスの体には何も変化が無かった。

それどころか逆にウォーウルフのもがき苦しむ声が聞こえたような気がした。

今になって魔術が効いた……可能性は極めて低いだろう。もしかして、相手は実は最初から怪我持ちで、無理をして闘っていたから……いや、もっとあり得ない話だ。

だとしたら一体なんだというのだろうか。

ロイスは死への恐怖で金縛られていた目をようやく開くことができるようになり、ゆっくりと視界を開かせた――

「おーい、大丈夫か落武者――？」

「……………ルキ!？」

確かに置いて行つて確実に距離を離れたはずのルキが、ロイスの目の前にいた。目を丸くしているロイスを尻目に、ルキは突然抱えてきて木の裏に移動させられた。

「な……………なんでお前がここに——」

そういえばそうだったな——

そんなどうしようもなく変哲な出会いが、俺の冒険を始めさせたんだ——

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9600x/>

ANTI × BRAVER

2011年10月29日03時14分発行